Global Explorers to Cross Borders
G.ecbo
広島大学大学院国際協力研究科　大学院教育改革支援プログラム拠点

Newsletter

Vol.1　第2号

グローバルインターンシップ推進拠点の形成（G.ecboプログラム）
10年後の自分を探そう 世界と出会うインターンシップ

発行日:2008年11月

お知らせ:

- 演習科目　ディベート演習最終決勝戦を開催しました。
- 2008年度冬期派遣学生が決まりました。
- 2008年度夏期派遣学生からの報告会を開催しました。
- 留学生国内インターンシップ報告会を開催しました。

目次:

ディベート演習	1
冬期派遣学生の決定報告	1
履修科目内容	2
活動実施報告 事前研修	3
夏期派遣学生帰国レポート	4
留学生レポート	8
修了生就職活動記	10
卒業生からの声	11
今後の予定 シンポジウム	12

ディベート演習・公開決勝戦を開催しました

大学院教育改革支援プログラム「グローバルインターンシップ推進拠点の形成」の事前事後研修の必須科目として位置づけている「能力開発特論」の講義成果発表として、広島大学中央図書館内ライブラリーホールにて、7月18日にディベート演習・公開決勝戦を行いました。

今回のテーマは「日本は道州制を導入すべし」。予選を勝ち抜いてきた2チームが肯定側・否定側に分かれて白熱した議論を戦わせていました。判定を下すジャッジも選ばれた学生チームから構成されており、それぞれの論点をデータの妥当性なども踏まえて客観的に判断し的確な判定を下して講義の成果を遺憾なく発揮していました。

2008年度冬期派遣学生を決定しました！

10月に今年度冬期派遣学生募集を行い、2008年度冬期G.ecboプログラム派遣学生として10名の学生がインターンとして海外へ派遣されることが決まりました。

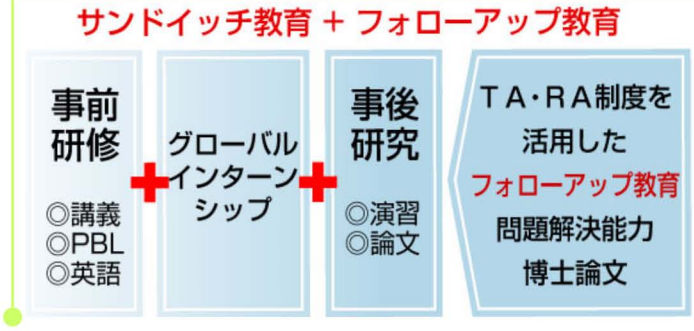
冬期は高度の専門性および高い語学力を要望されている研修先が多い為、英語研修・PPTトレーニングの事前研修も完成度の高さを要求されています。派遣までの数ヶ月間に自身の研究そして語学力の向上にむけて力を注いで欲しいと考えます。

【2008年度冬期G.ecboプログラム派遣学生】

Shwe Zin Ko（国際協力研究科・開発政策）　野口洋子（国際協力研究科・教育文化）　Piya Luni（国際協力研究科・教育文化）　Anwar A.H.M. Mehbub（国際協力研究科・開発技術）　Nirupika Samanthi Liyamapathirana（国際協力研究科・開発政策）　池田剛（国際協力研究科・開発技術）　片岡義久（国際協力研究科・開発技術）　森永茜（国際協力研究科・開発政策）　岩知道秀樹（教育学研究科）杉野本勇気（教育学研究科）　計10名

事前研修ガイダンス

G.ecbo教育プログラム履修科目



G.ecboプログラムは、約1ヶ月間の海外インターンシップを柱として、事前にPBL教育およびコミュニケーション能力向上のための研修を主とする事前研修と、事後の研修報告会やディベート演習等のフォローアップ科目の受講からなる事後研究を実施するサンドイッチ教育プログラムと、ティーチングアシスタントやリサーチアシスタントとして後輩の指導・プログラムへのフィードバックを行うフォローアップ教育からなるプログラムです。

PBL (Problem based Learning) 形式科目：選択必須1科目

開発技術論 Development technology
国際協力特論 Theory of international environmental cooperation
教育協力実践基礎論 Fundamental theory of practice in international cooperation in education

講義形式科目：選択必須1科目

アジア・アフリカ教育論 Education in Asia and African countries
平和構築論 Peace Building

演習形式科目：

能力開発特論(ディベート演習) Developing debating skills

教育協力実践基礎論 Fundamental theory of practice in international cooperation in education

授業でのグループワーク/
Group working

主として実践的教育プログラムに参加する学生が、問題解決型学習(Problem Based Learning: PBL)に基づき、教育協力分野で活動するために必要な次の三点の能力を身につけることを狙いとする。つまり、開発途上国の教育問題を全体的に理解すること、教育協力プロジェクトの考案を通し、特定の条件に応じた解決方法を取捨選択、実行する能力を身に付けること、さらに開発途上国の問題をより本質から問い直すことを目的としている。その内、二番目の実践的な問題解決能力には、問題整理・発見と解決手段発見の能力、考えをまとめ・発表・説得する能力、グループワークを通した他者とのコミュニケーション能力やリーダーシップ能力などの能力を含めている。

遡上教育プログラムの開始【フォローアップ教育の充実化】

G.ecboプログラムフォローアップ教育の拡充を図るために今学期より遡上教育プログラムを実施することになりました。遡上教育プログラムはインターンシップ等海外研修の経験者(博士課程後期学生）を再度研修地域・機関等へ派遣し、それぞれの実践的研究の高度化をはかることを目的としています。プログラム参加者が博士課程前期課程のインターンシップで得られた知見を後期課程の遡上教育プログラムでさらに深化できるなど高い教育効果が見込まれています。博士論文や論文執筆に繋がる調査研究活動推進の「研究プロポーザル型」とインターン実施機関・地域への追加調査やインターン生の指導・助言を含む「フォローアップ型」を実施します。

2008年度冬期派遣については「研究プロポーザル型」の募集を行い、国際協力研究科の博士課程後期在籍中の内田豊海さんと澁谷渚さんが選考されました。

内田　豊海【教育開発コース】
研究テーマ：ザンビアにおける算数科学力の診断的評価法　-　妥当性と弁別性に注目して－

澁谷　渚【教育開発コース】
研究テーマ：開発途上国における数学の授業開発に関する研究
－SLEを基盤とするザンビアにおける実践から－

活動報告
2008年度第2･3四半期
(7月-10月)

7月9日
第3回英語プレゼンテーション研修　実施

7月18日
ディベート演習公開討論決勝戦　開催
(於:広島大学中央図書館ホール)

7月22日
海外インターンシップ壮行会　開催

7月23日
国内インターンシップガイダンス　実施

8月7日
国内インターンシップ
PPTプレゼンテーション研修　実施

8月18日-29日
国内インターンシップ　実施
(於:㈱サタケ本社)

9月5日
G.ecbo幹事会　開催

10月1日
冬期派遣学生公募　開始

10月6日
冬期派遣学生募集説明会　開催

10月16日
2008年度第2回FLARE英語研修　開始

10月20日
冬期海外インターンシップ募集　締切

10月28日
冬期海外インターンシップ面接選考　実施

10月29日
夏期海外インターンシップ帰国報告会(第1回)　開催

10月29日
夏期海外インターンシップ帰国報告会(第2回)　開催

海外インターンシップ壮行会
海外派遣を控えて期待と戸惑い両方を抱えながらもインターンシップへの抱負を語ってくれました。国内インターンシップ参加者も交えて大人数大盛況の会でした。

国内インターンシップPPT研修
日本企業での研修のため、日本におけるビジネス慣習のガイダンスとコミュニケーション能力および発表能力の向上を主に図りました。

2008年冬期募集説明会
参加者　39名
前年度にUPNISMEDへのインターンシップに参加した高松さんの体験談発表も大変有意義で、参加者は真剣に耳を傾けていました。

2008年度夏期派遣学生帰国報告会
第1回参加者28名、第2回参加者23名

2008年度夏期派遣学生　帰国レポート

生物圏研究科　Graduate School of Biosphere Science

研究科HP: http://www.hiroshima-u.ac.jp/gsbs/index.html

山下　早紀子　Sakiko Yamashita

<Venue of Internship/研修先>:インドネシア　ガジャマダ大学　Gadjah Mada University, Indonesia
<Duration of Internship/研修期間> :2008. 08.16～2008. 09.06
<Research Theme/研修テーマ>:カンキツグリーニング病

研究室にて　With Lab Mates

柑橘グリーニング病のサンプリング

インターンシップレポート　Internship Report

今回研修テーマとしたカンキツグリーニング病（以下CG病）は、「特定重要病害」の一つに指定されているカンキツ類に重症な被害をもたらす病気である。現在のところ有力な治療法・予防法はなく、感染を防止するには罹病樹を伐採・焼却するしか手段はない。しかし、このことは経済園などにおける果樹園において経済的に大きな被害をもたらしている。(中略)

インドネシアについて最初の3日間はカルチャーショックでたった3週間なのにやっていく自信をなくしていた。事前研修でも英語に不安を残したままだったため、インターンシップ前から楽しみより不安が断然大きかったのだが、着いてからさらに不安は増大した。空港に降り立ってからの国の雰囲気や空気、町並みや食べ物、当たり前だけれど全部が違っていた。寮についてからのシャワーが出ないというハプニングはとどめの一撃だった。翌日には大きなゴキブリが出るし、文字通り最悪だった。しかし、このゴキブリとの遭遇は幸か不幸か私に英語で退治してくださいとお願いする勇気を与えてくれた。 (中略)
今回のインターンシップでの経験は私にとってかけがえのないものとなった。また、みんなに自慢したくなるような経験がたくさんできたと思う。　楽しいことだけでなく、辛かったこともちろんあるけれど、周りの方のおかげで無事最終日を迎えることができた。今回学んだことは、グリーニング病はもちろんだが、いかに自分が恵まれた環境にいるかということも実感したし、現地の方にも言われた。何の不自由もなく実験できていることや、いろいろなものが簡単に手に入るなどということに、今までは分かっていたようで本当には分かっていなかったのだと感じた。

英語については、うまく伝えられないもどかしさも感じ、まだまだ努力が必要だと思った。今回学んだことを、良かったと終えるのではなく、今後どう生かすかが重要だと思う。今回の経験を生かし、さらに研究や勉強等さまざまなことにチャレンジし、頑張っていきたい。

吉田　絵美　Emi Yoshida

<Venue of Internship/研修先>:中国(蘇州)佐竹機械有限公司
<Duration of Internship/研修期間> :2008. 09.01～2008. 09.24
<Research Theme/研修テーマ>:中国における米フードシステムの観察
ー精米業から見た米流通の特徴ー

米の流通システムの調査で生産地や市場まで様々な場所を短期間で調査されていました

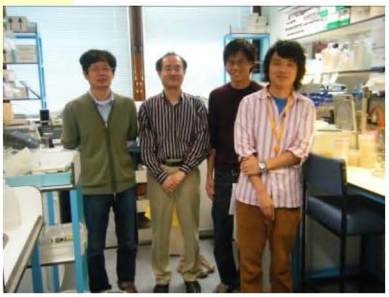
研修について

自ら考え、主体的に動くことが大切である。
そして、積極的に周りに協力を求めること。アドバイスがもらえるし、協力できること・できないことをはっきり言ってもらえるので非常に動きやすかった。

後輩へのアドバイス

・研修中のテーマを考え、出来る限り資料の収集やアンケートを作成しておくこと。
・簡単な中国語会話の本を持っていくと便利。
発音を教えてもらうなど、コミュニケーション作りにも有効。

小西　学　Manabu Konishi



左からDr. Masuda, Dr. Toda,
Mr. Chi Shyang, 小西さん：研究室にて

<Venue of Internship/研修先>: Cancer Research U.K.(CRUK)
<Duration of Internship/研修期間>:2008. 08.04～2008. 09.04
<Research Theme/研修テーマ>:分裂酵母微少管毒超感受性株の機能解析

インターンシップの印象/Impression of Internship

充実した設備や環境での研究生活は、毎日が刺激的でした。
特に、このインターンシップを通して学んだことは、以下の二つです。

まず、時間の使い方の重要さです。派遣先では、毎日12時間以上は研究室で実験を行っていましたが、一ヶ月間で結果を出し、それを整理するのには時間が足りませんでした。インターンシップを通して、時間をうまく使うことが、成果を出すことに直接繋がることを実感しました。

二つ目は、筋道を立てて話すことの重要さです。当初、英語力に自信がない私は、新しい実験を習得できるか不安でした。しかし、研究室の人は、教え方がとても上手で、その心配はまったく必要ありませんでした。英語力は当然ですが、筋道を立てて話すことの大切さを学びました。

今回、得られた経験を、今後の生活にも活かしていきたいと思います。

研究の合間の一息

高岡　勇輝　Yuki Takaoka

<Venue of Internship研修先>: 高雄長庚紀念醫院(台湾高雄市)
<Duration of Internship/研修期間>:2008. 09.01～2008. 09.21
<Research Theme/研修テーマ>:抗ヒストンH1抗体の肝炎に対する影響の検証

インターンシップレポート　Internship Report

研修については“そこでしかできないことを”を目的として行いました。違う研究室での研究は戸惑いや困ること、またそれまで考えもしなかった考え方を知ることが多々ありました。例えば、始め私は広島大学と同様の実験方法である実験を行っていましたが、全くうまくいきませんでした。担当教官の先生といろいろ話し合うと研究室が変わると、実験方法も考えなおさなければいけないということを言われました。実験がうまくいかない原因は様々ありますが、その中で考えもしなかった原因が水でした。その国・地方で水に含まれるミネラル分などが異なるため、それが影響するといったものです。このように驚かされることの連続でした。

実験の様子During experiment

今回の研修で得られた最も大きなものは、『どんな環境でも適応できる包括力と積極性』です。違う研究室で、さらに海外という全く異なる環境で研修を受けることで日本の常識が常識でないということを痛感しました。例えば、日本の研究室では夜遅くまでいることが普通ですが、台湾の研究室では午後5時にはほとんどの人が帰宅し、遅くても7時には研究室のカギが閉まっていました。そういう環境では実験を何がなんでも夕方までに終わらせなければならず、常にプレッシャーを感じながら実験をしていました。しかし、そのうちにそれにも慣れ、効率的に実験を行うことで、対応しました。

研究室のメンバーと
With Lab members

また、コミュニケーションについても分からないことがあったら、こちらからすぐに英語で話しかけて問題を解決していきました。幸いにも台湾人はみんな非常に親切で、優しく、面倒見がよかったので、どんな些細な質問でも快く答えてくれました。積極的に話しかけていった事がこの研修が成功した最も大きな要因だと思います。

事前事後研修の中で専門・研究については指導教員の先生方のご協力を得ました。文理研究分野を超えてインターンシップ研修をうけることは学生間で大きな刺激になったようです。

国際協力研究科　Graduate School for International Development and Cooperation

研修先	Almec Co. Ltd., Hanoi, Danang, Vietnam
研修期間	8. Aug.2008 – 12.Sep.2008.
研究Field	・Investigation of a bottleneck of investment in Danang city IZs(Yamaguchi) ・Fundamental examination concerning possibility of using 'Michi no Eki' after installing it (Murayama) ・Transportation Mode Choice for Commute Trip in Hanoi(Kanemoto)

インターンシップのまとめ/ Impression of Internship

山口　真人　Matoko Yamaguchi

研修地:ダナン市 Danang city

このインターンシップにおいて、調査を行うことで見識を深めることが出来たのはもちろんのことながら、途上国の空気を直接肌で触れるという貴重な機会を得ることができ、ODAを通じた国際協力を企業の立場から見ることができ、更には計画立案・実行を通じた様々な失敗から得ることができた経験は実に研究室の活動では得難いものでした。非常に簡単なところでは公のメールのやり取りから始まり、実際に企業の方へのインタビューを行う際に必要になってくるポイントは何かといった点まで、今回得ることの出来た経験は今後の大きな財産になると思います。

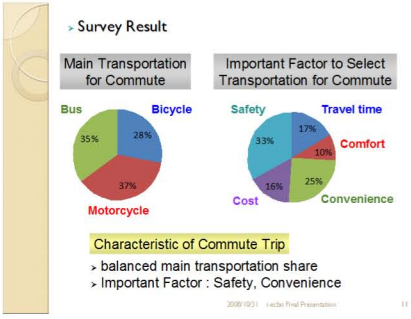
村山　直輝　Naoki Murayama

オフィスにて　with colleague

アルメックのI社長は「将来に関係のないことのようでも、学生のうちに沢山挑戦し経験を積むことは一生の財産になる。」とおっしゃってくれた。特に若いうちは目標や目的に縛られて視野を狭くしがちであり、回り道のように見えても自分のしたいことや目的に向かって努力や挑戦をすることはとても重要であるということである。

本研修では、ベトナムにおける道の駅導入に焦点をあて、そこから情報提供効果や地域産品の販売による地域振興効果に着目した。しかし、日本から一度も出たことの無かった私にとって、文化の違いや考え方といった国民性の違いは大きく、現地では幾度となくこの問題にぶつかった。限られた時間の中で問題発見、発見した問題の分析、解決方法の考察までを行う経験をつけたことは、修士論文をはじめ、社会で今後ぶつかっていく問題に立ち向かう上で非常に大きな財産になったと思う。

金本　和也　Kazuya Kanemoto



調査結果・Survey Result

今回の研修を振り返ってみると、派手なものではないが今の自分にとって本当に有意義なものだったと思う。特に研修を通して「現場を知ること」「柔軟性をもつこと」の二つの重要性を私は痛感したのだが、この二つこそ今回私が感じたデザイン能力の要素であり、今までの自分になかったものである。一つ目の現場を知ることとは、研究をするにしても何かを調べるにしても資料を読むだけではなく、実際にその現場に行ってみることが大切ということである。実際の現場に行けないとしても、当事者の立場にたって考えることが大切だと感じた。二つ目の柔軟性をもつこととは、自分が注目していることを本当に理解するにはそれだけに注目するだけではだめで、それを取り巻く全体にも目を向けることが大切だということである。この二つに加えて調査設計の重要性もデザイン能力の一部として強く感じたのだが、この二点については研究だけではなくどんなことにでも言えることだと思っているので大きな財産になったと思う。今後に積極的に活かしていきたい。

Jeon Hyoen Jeong （*South Korea出身*）

<Venue of Internship/研修先>: JICA (Japan International Cooperation Agency) JICA Ghana Office
<Duration of Internship/研修期間>:July 25, 2008 ~ September 11, 2008
<Research Field/研修分野>:Education and Industry Section, JICA Ghana Office Ac-

JICAガーナオフィスにて
At JICA Ghana Office

It was a life time experience for me to have an internship at JICA.

First of all, working with Japanese people and Ghanaian people was especially meaningful to me. There are many cultural, social, traditional, organizational differences between Korea and Japan, and there are much more when it comes to Asia and Africa. As a Korean working in a Japanese organization in Ghana definitely means something to me.

It also was a wonderful chance to learn international development community and activities of development partners. This time, I was able to engage in activities, especially in the local industry promotion program. Another main activity which I engaged in was shea butter industry. Shea butter which is extracted from shea tree in Savannah has been very popular as a natural cosmetic material in many developed countries. Through the field trip, I could understand and learn the industry and their challenges & current situation. This is greatly helpful for my master's thesis and I could get related materials and information from JICA Ghana Office. Staying in Ghana and integrating myself in the African culture was another great experience. Since I had very little understanding of developing countries and their poverty issues, I tried to experience what exactly the Ghanaians go through so that I could understand them more. Through this effort, I could interact with many Ghanaian people and it really encouraged me to understand them and their culture.

フィールドトリップ
Kumasi field trip

アフリカ・アジアの子供たちの笑顔をインターンシップ先から送ってくれました。地域社会に溶け込んだ活動の様子が伺われます。スリランカ出身のアジスさんは現地の方と間違われるほど地域に溶け込んで研究活動していた様子です。

Ajith Balasooriya （*Sri Lanka出身*）

<Venue of Internship/研修先>: ICLEI Local Government for Sustainability, Quezon city, the Philippines
<Duration of Internship/研修期間>:July 26, 2008 ~ September 14, 2008
<Research Field/研修分野>:Clean Development Mechanism (CDM) and Cities for Climate Protection Campaign (CCPC)

As a Gecbo intern I had the chance to go to ICLEI in the Philippines for two months. I reached the Philippines on July 26, 2008 and started my internship activities from July 29. For the first two weeks I reviewed literature on my field tasks. Mainly, I have gathered new knowledge on Clean Development Mechanism (CDM) and Cities for Climate Protection Campaign (CCPC).
The most important part of my internship was field observation of the on-going CCPC project in Naga City in the Philippines. During my two weeks observation I acquired unbelievable field experiences in my entire career. In particular, community participation and its effects on the social development was the lesson that I learned from Naga. Apart from that, I was able to understand the function of the local government and its linkage to society in a very practical manner. Moreover, I realized the issues and challenges that influence sustainable development.

Finally, I have gained and realized the importance of community-based micro level social development projects and nature of various social groups in society. I experienced the culture, social values and lifestyle of Filipino people. These diversities and characteristics are found in ICLEI, SEA office and in Naga City.

I conclude that my internship is a one of the unforgettable academic experiences which I can contribute to my country as well as to my own life.

派遣先のナガ市にて
In Naga city

国内インターンシップに4名の留学生を派遣しました。

G.ecboプログラムでは、今年度より広島大学大学院在籍中の留学生を対象として国内インターンシップの実施を拡充いたしました。今年度は株式会社サタケ様のご好意により4名の留学生を受け入れていただきました。日本企業での経験は留学生にとっては日本語もさることながら、ビジネスマナー等の違いや企業人としての意識など大学内では経験出来ない事例が多くあったとコメントを寄せています。より一層日本の社会や文化への考察を深めることが出来たようです。

Juraev Islomjon　（経営本部人事部）

(Uzbekistan出身)

お世話になった人事部の皆さんと

My internship at Satake Corporation began with a general orientation about the company, followed by other orientation seminars on workplace, history of Satake Corporation and its organization, company's policy on education, etc. Though not long, my two-week internship was very interesting and challenging for me. During the internship period I learned lots of new knowledge. First of all, I spent two weeks in the Human Resource Department and experienced the working atmosphere of the department personally and got acquainted with Japanese work ethics. Besides, I obtained new knowledge about machineries for food processing and food technology. One of the most interesting things for me was the strict hierarchical structure within the department, and as far as I know it is the same in other Japanese companies, too.

日本　語でのプレゼンを行いまし

Overall, the internship at Satake Corporation was very well designed and very informative. I learned lots of new knowledge and information which would be very useful for me in the future. Besides, the everyday conversation with the staff, translation of the recruitment webpage and the preparation for the presentation on Uzbekistan improved my Japanese language proficiency level. I am grateful to Satake Corporation for giving me this opportunity.

ほとんど日本語での職場環境にもすぐ慣れた様子で、母国ウズベキスタンについてのプレゼンテーションは高い評価を受けました。

Shams Shamsul Hadi　（海外事業本部アジア事業部）

(Afghanistan出身)

フィールドツアーで広島港へ

The internship was highly useful in terms of learning new things, coming across new opportunities to work as well as to learn. It is very rare to have the opportunity to meet and see first hand resources that will guide my future career.

In this regard, I really appreciate the G.ecbo efforts to provide such fantastic opportunities to the overseas students to explore and study and then apply it for their best career and future.

The environment was very friendly and the personnel were also very cooperative in SATAKE CORPORATION. I am completely satisfied with what I learned and gained through this internship and I am really hopeful that the rest of other interns will have the same feelings and impressions.

Shwe Zin Ko （海外事業本部アジア事業部）

(Myanmar出身)

オフィスでのシュエさん

ミャンマーでの実務経験を大いに発揮して、いつも笑顔で活躍していた様子でした。
日緬間の架け橋になって欲しいとの受入会社スーパーバイザーからコメントを頂きました。

I have learned a great deal during the internship and it has been a great experience for me even though it is not directly related to my research. First of all, I learned about rice milling machineries and the latest rice milling technology. Rice is one of the principal export items of Myanmar. However, rice production processes such as paddy drying, husking, milling, and storing are still being done by using traditional methods and outdated machineries. I believe that it is very important for our country to be able to utilize modern technology and machineries in order to produce better quality rice, and therefore, the knowledge I gathered from Satake would be very useful for my future career as an official in the public service.

Most importantly, I had an opportunity to have a hands-on experience on Japanese business and office management despite the fact that the duration of internship was quite short, only ten days. I have experienced very unique practices such as radio taiso, cho-rei and hou-ren-sou. Besides, I found out that the Japanese are hard-working and very good at team-work. I also observed that senior and junior relationship is very important in a Japanese company. As the company provides all the necessary facilities in the work place, working environment is very convenient.

The internship helped me to gain practical knowledge and understand more about Japanese management practices and work ethics as I have mentioned above and they are all very useful for me. I found that there are similarities as well as differences in management practices and work ethics between Myanmar and Japan and I believe we can adopt and adapt to many aspects of Japanese management practices in Myanmar.

張　前 （生産本部　生産管理部） *（中国出*

工場内での実地研修中

今回のインターンシップにて私は生産技術グループに配属され、生産技術に関する知識の習得、及び生産試作などを行いました。

文系の出身なので、理系に関する知識をあまり持ってない私にとって、最初はかなり不安でした。しかし、スーパーバイザや各部署の責任者からいろいろ教えていただき、最初の不安を解消しました。特にプレス作業資料を翻訳した時、専門用語が多いので、担当者から機械の構造及び作業原理を詳しく説明していただきました。生産技術に関する知識（例えば設計図の読み方、材料展開寸法の計算、標準時間の査定など）もたくさん教えてもらいました。試作実習の時、機械の操作方法についても丁寧に教えてくれました。

今回のインターンシップで、日本人の社員たちと一緒に仕事して、まだ日程が短いですが、自分自身の実感や社員たちとのコミュニケーションを通じて、日本の会社文化を一定的に体験しました。毎日朝の朝礼で会社の経営理念をみんな一緒に読み上げ、品質・顧客及び社会への責任感がみんなの意識の中に植えられています。社員たちの真面目な仕事ぶりや自分に対する厳しさが私に深い印象を与えました。ただ、毎日のようになされている残業は社員たちにとって、大きな負担ではないかと思います。また、広い事務室の中で、みんなは静かに仕事をして、余分なコミュニケーションをしないことも私の自国の職場文化と違うような気がします。

今回のインターンシップで、サタケに対する理解を深めました。オリエンテーション、ショールーム及び会社歴史展示館などの見学を通じて、100年の歴史をもつ国際企業サタケの強みを実感し、私の出身国－中国との縁の深いサタケに対する敬意を一層高まりました。一番重要なのは、自分の自信を高めました。つまり、文系の出身者にとって、理系の仕事が完全に出来ないわけでもないという意識を付けられました。

就職活動記（H19年度G.ecboインターン生）

宇野　元浩（国際研：開発技術講座）株式会社ニュージェック　就職予定

私は2007年8月23日より１ヶ月間、インドネシア・マカッサルにおいて日本ODAの援助による灌漑事業を担当している日本工営㈱の事務所でインターンシップを行った。マカッサル郊外は水不足による収穫量不足が原因でインドネシア国内でも貧困層が多く暮らしている地域である。

私は農家に対して灌漑事業の満足度調査を行い、どのような点に満足し、また不満なのかを定量的に把握することをテーマに研修を進めた。研修中最も印象に残っていることは、アンケートを実施した時の農家の皆さんの親切な対応である。インドネシア人の気質によるところもあると思うが、それ以上に彼らの生活を改善するために努力している日本工営に対する信頼が影響しているように感じた。

私は、就職するなら人の役に立つ職業に就きたいと漠然と考えてきたが、インターンシップを通して自分の将来について真剣に考える機会がたくさんあった。人の生活のために働くとはどういうことかを考えるようになり、自分の考えたものが着実に出来上がっていく喜び、やりがい、責任の重さなどが理解できた。この経験を就職活動中に面接で話す機会が多くあった。海外インターンシップの経験がある学生は少ない様で、どの面接官も熱心に質問してくださり、私もインターンシップを通して学んだ事や感じたことを明確に答えることができた。それによって良い印象を与えることができたのではないかと思う。自信を持って発言できるバックボーンは就職活動で必要だと思うが、私にとってはこの海外インターンシップがまさにそれになった。

研修期間は1ヶ月と短かったが、得たものは非常に大きくこれから先もきっと役立つときが来るのではないかと思う。

林田　さやか（国際研：開発政策講座）株式会社東芝　就職予定

「すごい経験ですね」就職活動の面接で毎回のように言われた。

そんな経験をしたのは、2007年8月から9月の1ヶ月間。私はベトナム・ハノイにある(株)アルメックにて、インターンシップという形で現地調査をさせて頂いた。調査内容は、現地の日系企業を訪問し、トップにインタビューを、現地人従業員にアンケートを行うことだった。現在、そのデータで修士論文を進めている。

現地調査の合間には、この機会を最大限に活かそうと各地の観光地を巡り、ハノイだけでなくホーチミンやダナンにも足を運んだ。現地の現状を知るにつれ、各都市の中心地は私の見慣れた景色＝高いビル、ショッピング街で、ベトナムが先進国に強く影響を受けているのを感じた。しかし、その外れはどこか懐かしい感じのする、時がゆったり流れている地域で、私はベトナムには独自の文化があり発展をしていく必要は必ずしもないのでは、とも思った。

取材を通してこそ知り得たこともあった。「この国には先進国から多くの最新製品が入ってきており、社会の急速な発展に人々の発展が追いついておらず、国が困惑した状態になっている」。もちろん日本もその先進国の１つであり、ものづくり大国として便利な製品を開発し続けてきた。しかしそれは本当に人々を幸せにしていると言えるのか。

このような考えから、私は、日本は自身が開発してきた製品を生み出すだけでなく、それが社会へ、文化へ、世界へ与える影響についても責任を持たなければならないと思い、電機メーカーに就職活動を行った。面接官には、その考えに共感を得られ、また単身での海外調査という行動力が評価され、複数の企業に内定を頂き、希望していた東芝にも内定することが出来た。

インターンシップ派遣中は無我夢中でとにかく走り回っていたが、実は尋常でない経験をしていたことに就職活動で改めて気付き、また自分にどれだけ大きな影響を与えた1か月だったのかを再認識出来た。

G-ecboはインターンシップがメインではあるが、同時に海外でほとんど単独行動という、いわば修行のようなプログラムで、しかしその分得るものは多い。1か月でここまで深い体験はなかなか出来ないと思う。いつか、現地でお世話になった方々、知り合った色んな国の人々に会いに行きたいというのが今の私の小さな夢である。

現在インターンシップ中 学生現地リポート

国際研（開発政策講座）：難波一宏
フィリピン/ICLEIにて

In late October, I prepared for a visit to Baguio and made a material for the survey with the help of ICLEI staff (especially the translation into Tagalog).
This is the photo with a family who owns the eatery where I often have dinner. The owner has lived in Okinawa once and is so kind that he served me raw oyster (sugaki).
All food are similar to Japanese dishes and my favorite is pakbet.
Ingat (take care)!

学内の方へ

リスク管理セミナーのお知らせ

日時：12月11日（木）
18：00～19：30
場所：総合科学部　L201

【概要】
- 外務省DVD「なぜ君がねらわれるのか」
- 海外渡航者向け全般的注意事項
- 感染症・予防接種情報
- AIU　海外旅行保険について
- 途上国渡航に必要な補足情報

G.ecbo学生は海外渡航前に必ず受講してください。また、その他の学内関係者もぜひご参加ください。

～G.ecbo OB/OGからの便り～

現JICAジュニア専門員：菊池　亜有実さん

2006年度教育文化コース修了生の菊池亜有実です。2005年度のECBOプログラムに参加し、フィリピンのUP-NISMEDにて7週間のインターンシップを行いました。UP-NISMEDでは、JICAプロジェクトの第三国研修としてケニア人理数科教師への研修が実施されていました。私はUP-NISMEDの講師補佐として、研修教材の準備・予備実験の実施・フィールドトリップへの引率・ICT研修での補佐などをさせてもらいました。研修の終盤にはケニア人研修員のリクエストに応え、模擬授業を行い日本の授業案の構成などを説明する機会をもらいました。初めて教員研修を実施するという経験をすることができ、とても勉強になった7週間でした。

IDEC修了後はJICAのジュニア専門員となり、JICA本部の人間開発部基礎教育第1課で国内実地研修を行いました。基礎教育第1課ではモンゴルとスリランカで実施中の教育プロジェクトの案件管理を任されていました。2008年9月からは海外実地研修として「マラウイ中等理数科現職教員再訓練プロジェクトフェーズ2」に派遣されています。マラウイでは急激な教育の量の拡大の結果、資格を持った教員が足りず、多くの先生は未資格・低資格の教員です。また、教科書などの教材も十分にはありません。プロジェクトでは、未資格・低資格の先生方が自信を持って授業を行えるように、授業をするために必要な教授内容と教授方法に関する研修を実施しています。私は理数科教育分野の専門家として、研修で使用する教材の作成に係る支援、授業改善のための支援などを中心に活動をしています。IDECで学んだこと、研究したこと、ECBOプログラムで経験したことは、現在のマラウイでの活動の基礎になっています。

マラウイ・月に1回行われているToT（Training of Trainers）の様子

マラウイには9月に赴任したばかりでわからないことばかりですが、マラウイの中等理数科の先生方に役に立つ研修を提供すること、学校訪問・授業観察を通し、具体的にどのように授業を改善していくべきなのかを提案できるよう、日々勉強し頑張っていきたいと思っています。

2008年度第3・4四半期 活動予定

*冬期学生英語プレゼンテーション研修実施中
（11月より順次3回程度開催予定）

*リスク管理セミナーを開催します。（12月11日）－11ページ参照

*インターンシップ派遣（2月/3月）

*海外インターンシップ先への教員訪問・現地報告会開催

*第2回G. ecboシンポジウムを行います。（2月）

広島大学大学院国際協力研究科
〒739-8529　広島県東広島市鏡山1-5-1
電話　082（424）6910(入試担当)
電話　082（424）6950(事務局)
Email: iecbo@hiroshima-u.ac.jp

第2回グローバルインターンシップ推進拠点 (G.ecbo)年次総会　(予告)

今年度のシンポジウムでは、他者との関わりや文脈を重視して事象を捉えていく「臨床の知」をキーワードに、現場での活動を経験・体験のレベルにとどめることなく、分野及び文化横断的視野を醸成させ、かつ、より高次な知見へと昇華・蓄積していくための教育方法をどう確立していくかについて議論してゆきます。どうぞお誘い合わせの上、奮ってご参加下さい。

日時：2009年2月4日（水）9:50～17:00
場所：広島大学　学士会館2階レセプションホール

＜プログラム（予定）＞

【第一部】グローバルインターンシップ成果発表会
-インターンシップ派遣学生による事後報告-

【第二部】グローバルインターンシップ推進拠点シンポジウム

テーマ「いかに現場での体験を「臨床の知」へと高めるか
－インターンシップを契機とした大学院教育の新たな展開－」

話題提供：
京都大学GP「臨床の知を創出する質的に高度な人材育成」代表（予定）
パネルディスカッション：川辺みどり　東京海洋大学准教授
肥後靖　国際協力研究科教授　他

事務局編集後記

夏期休業中に様々な国・機関に派遣された学生たちの汗を感じられるような報告をお送りいたします。英語でのPPT研修に苦労していた学生達がインターンシップ終了後、達成感に満ち溢れた「いい顔」をして帰ってきた姿を一片でも感じ取っていただければ幸甚です。最終報告会では成果を発揮してすばらしいプレゼンをしてくれました。学生自身の努力はもとより、派遣先企業・機関でのご指導のお陰と末筆ながらここに厚く御礼申し上げます。次号ではUNESCAPでの経験を掲載する予定です。（G.ecbo事務局）

次号予告

目次：
* 夏期派遣学生の報告②
* シンポジウム開催報告
* ECBO修了生からの声
* 冬期インターンシップ派遣中間報告
* その他

ホームページもご覧下さい。
http:// www.hiroshima-u.ac.jp/gecbo/index.html